

※ご注意

この作品は18歳以上の方向け
となっておりますので
18歳未満の閲覧を禁止します。

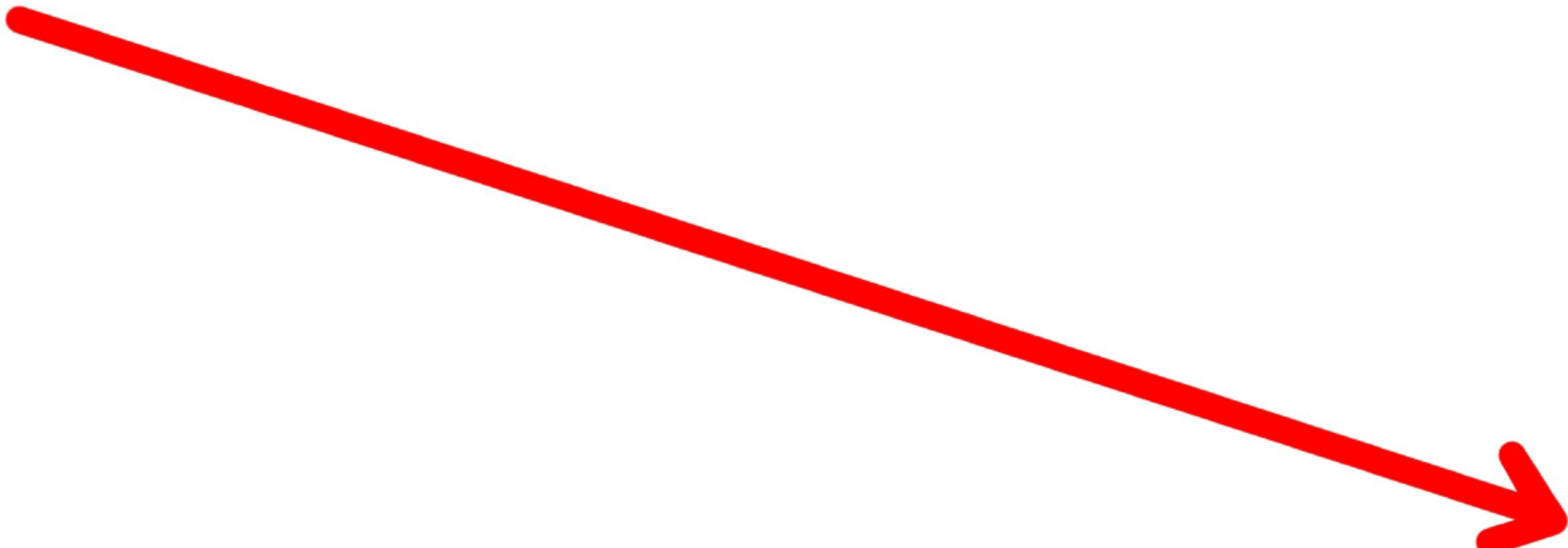
この作品はフィクションであり、
実在する人物、団体名等とは
一切関係ありません。

※このCG集の読み進め方。

① 右上から
スタート。



② 左上にテキストが
無ければ右下へ。



③ 右下にテキストが
無ければ左下へ。



④ 左下にテキストが
無ければ
次のページへ。

※サクサク使いたいという方へ。

色分けされた台詞テキストを見るだけでも
大体の内容は把握できますのでおススメです。

20XX年、東京・S区。

金と暴力が渦巻くS区の闇の中で
悪を狩る存在があった。



『首切り半蔵』

誰がそう呼び始めたかは定かではない。

古くから日本の歴史の裏で暗躍してきた諜報組織、
忍衆（しのびしゅう）の一員であるという噂は
悪党たちの間で公然の事実として認識されていた。

半蔵は表の世界で

荒沢穂波（せりさわほなみ）と名乗り

S区学園の教師として生活をしていった。



そこで彼女は人生で初めて
心の安息を得られる男と出会った。

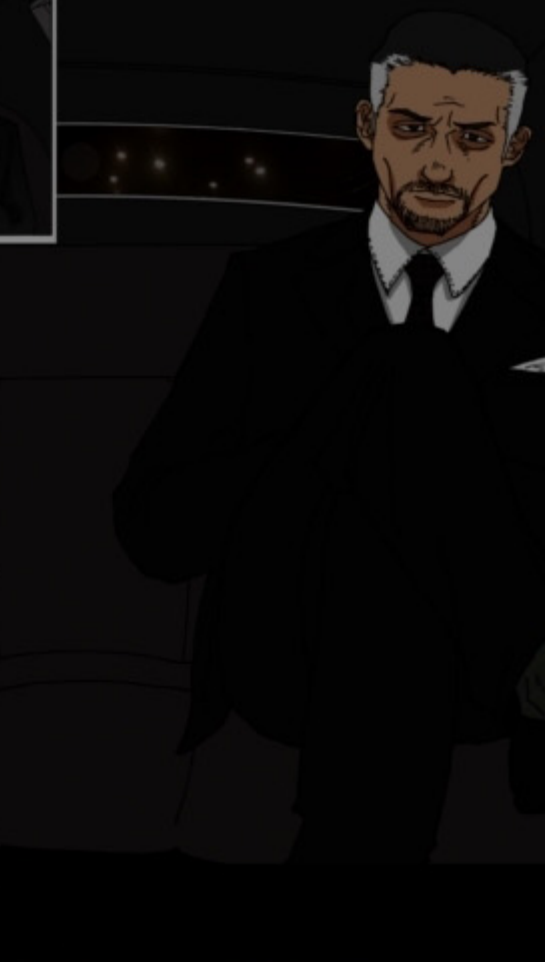
同僚の小川牧人（おがわまきと）は
実直で柔らかな性格だったが

半蔵に対する思いは激しく、
その熱意に負けて付き合い始めた。

やがて小川牧人への思いが強くなった半蔵は
彼の気持ちに応える為、

人殺しの世界から足を洗う決意をする。

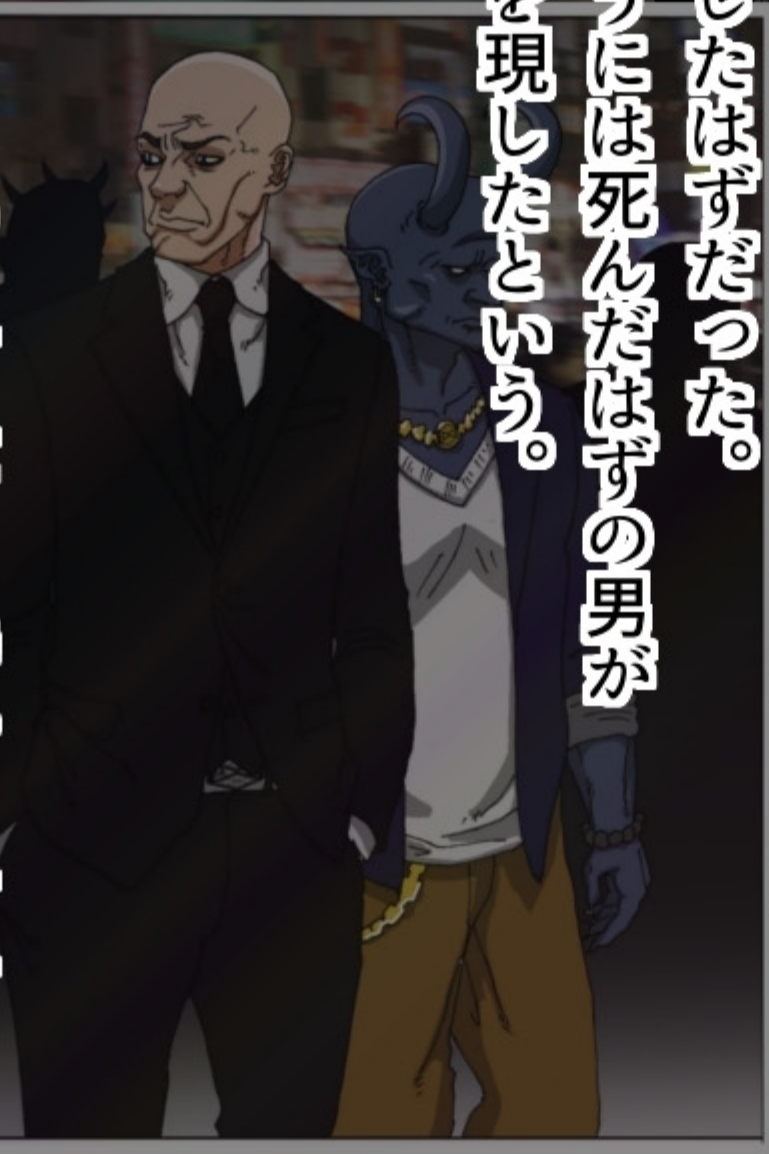
忍衆の頭領はこれまでの半蔵の功績を考慮し、
一線を退く旨を認めたが、彼女が唯一
やり残した任務を終わらせる事を条件とした。



三年前、半蔵は任務により暴力団組織田沼組の

若頭、稲富を殺したはずだった。

しかし頭領が言うには死んだはずの男が
今再びS区に姿を現したという。



半蔵はかつて田沼組を潰した時手を組んだ

S区所轄の組対刑事に再び連絡を取り、

稲富及び稲富を長とする新たな暴力団組織

「狭刃会」の情報を集めた。

そしてその情報を元に

稲富の暗殺計画を立てるのだった。

この任務を終わらせ、ただの一般人
荒沢穂波として生きていく。
そして愛する小川牧人と共に生涯を過ごす。

半蔵は強い決意を胸に

路地裏で最後の標的と対峙した。

しかし現れた稲富は半蔵の表の顔も

この待ち伏せも全て承知していた。

半蔵はかつて協力した組対刑事が
稲富の犬に成り下がってしまった事を
知るが既に手遅れであった。

焦りと慢心が無敵であったはずの半蔵に
大きな隙を生ませたのだった。

醜い肉塊、触手の怪物と化した稲富に対して
半蔵は為す術も無く翔られ意識を失ってしまう。



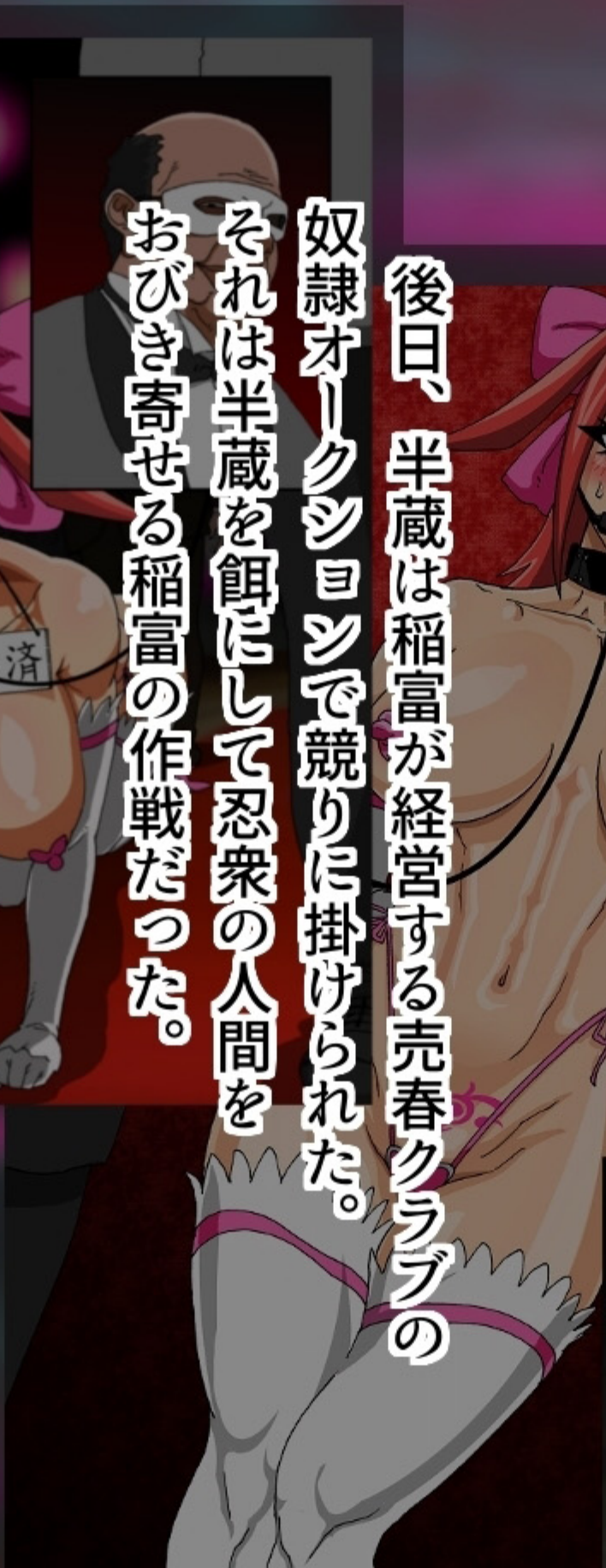
地下室に監禁された半蔵は拷問によつて忍衆の情報を吐かされないよう強力な自己暗示によつて忍衆、そして半蔵であつた自分の記憶を封印してしまふ。

稲富の部下による凌辱、調教師の長時間に及ぶ快樂責めでも半蔵は一切の情報を吐かなかつた為、稲富とそのバツクにいた怪人は別の策を講じる事にした。

後日、半蔵は稲富が経営する売春クラブの奴隷オークションで競りに掛けられた。それは半蔵を餌にして忍衆の人間をおびき寄せる稲富の作戦だつた。

過熱した入札合戦の末、半蔵を競り落としたのは半蔵が最も生理的嫌悪する職場の上司、S区学園理事長の戸熊慶三（とくまけいぞう）であつた。

戸熊は競り落とした半蔵を自宅のマンションに連れ帰り初夜をたつぷりと味わつたのだつた。



半蔵の熟れた肉体をひとしきり味わった次の日、
戸熊の目の前に青頭巾を被った男が現れた。

「いつも理事長、はじめまして」

「んあ！？なんだあお前は。」

警備主任はどうした！

あいつ虫二匹入れさせないとか

ほざいておつたのに！！」

戸熊が所有する高級タワーマンション

最上階フロアは三重四重の

生体認証セキュリティが特注で施されており、

大国の特殊諜報員ですら侵入は困難を極める。

それをこの男は一体どうやって入ってきたのか。

「その警備主任に入れてもらったんですよ」

「…はあ？」

おおよそ想定外の答えが返ってきて戸熊は混乱した。

『まあまあ落ち着いて。』

僕は稲富のビジネスパートナーってやつでして。今日は理事長が競り落としたあの女をもっと楽しいオモチャにするためやってまいりました』

『おお、なあ〜んだ稲富君の知り合いかね。』

そういう事なら早く言いたまえよ。』

それで入ってこれたのか。』

……で、わしの穂波ちゃんをどうすると?』

『まず知っておいて欲しい事があるんですが』

彼女の頭の中には本当の自分、』

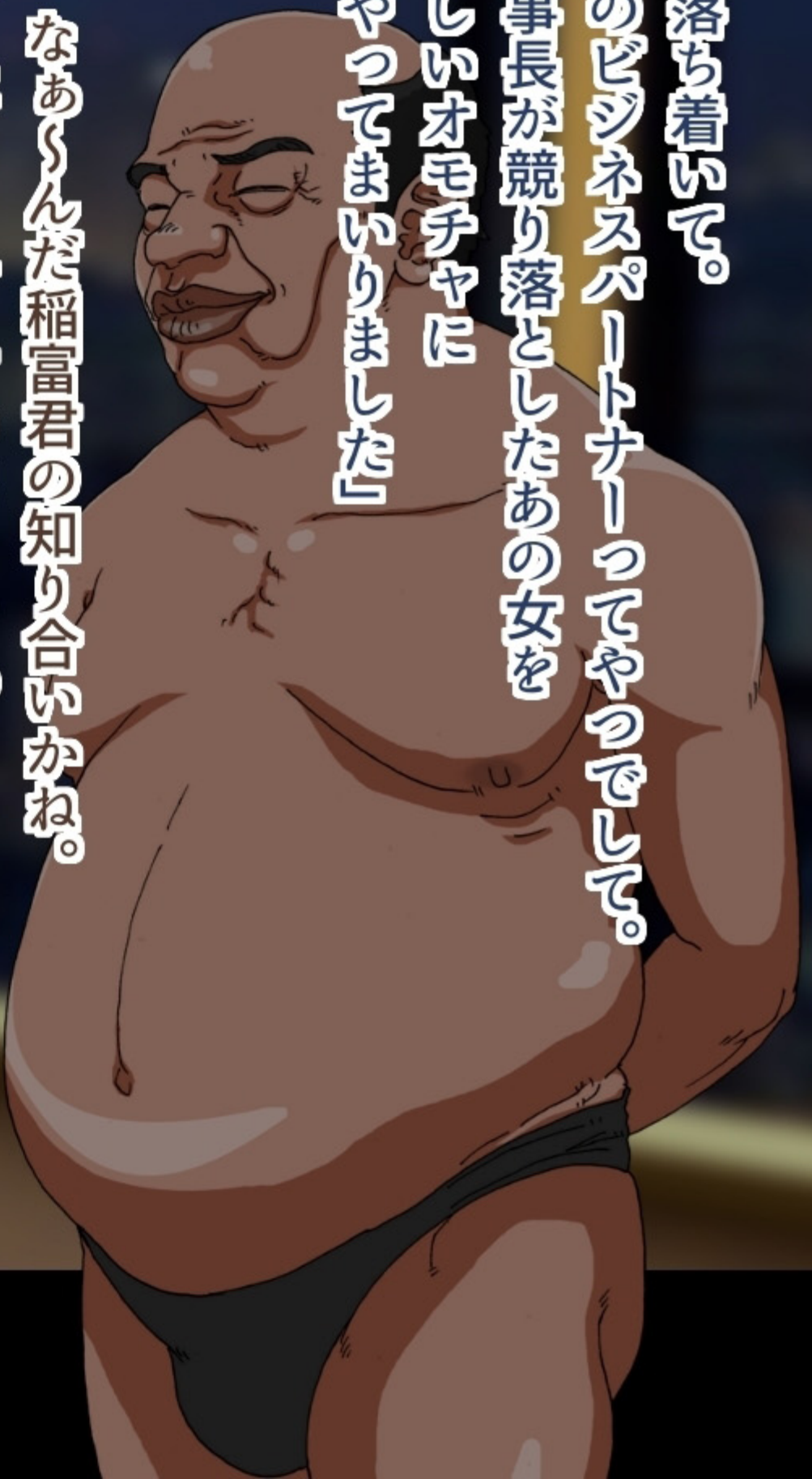
首切り半蔵としての記憶がありません。』

正確にはあるんですが、頑丈な鍵がかけられ』

記憶の蓋が開かない状態にあるわけです』

『ふむ、一応それは』

競り落とした際に聞いたが……』



「折角S区で恐れられた最強の殺し屋、伝説の忍を抱けるといふのに肝心の本人にその記憶が無いというのはつまらないと思いませんか？
貴方が雇用するただの教師としての彼女を抱くだけなんて勿体無いでしょう？」

「ま、まあ確かに……。」

わしがずっと目を付けていた穂波ちゃんとしてではなく

あの首切り半蔵を思い切り犯したいと思わなくもないが……。

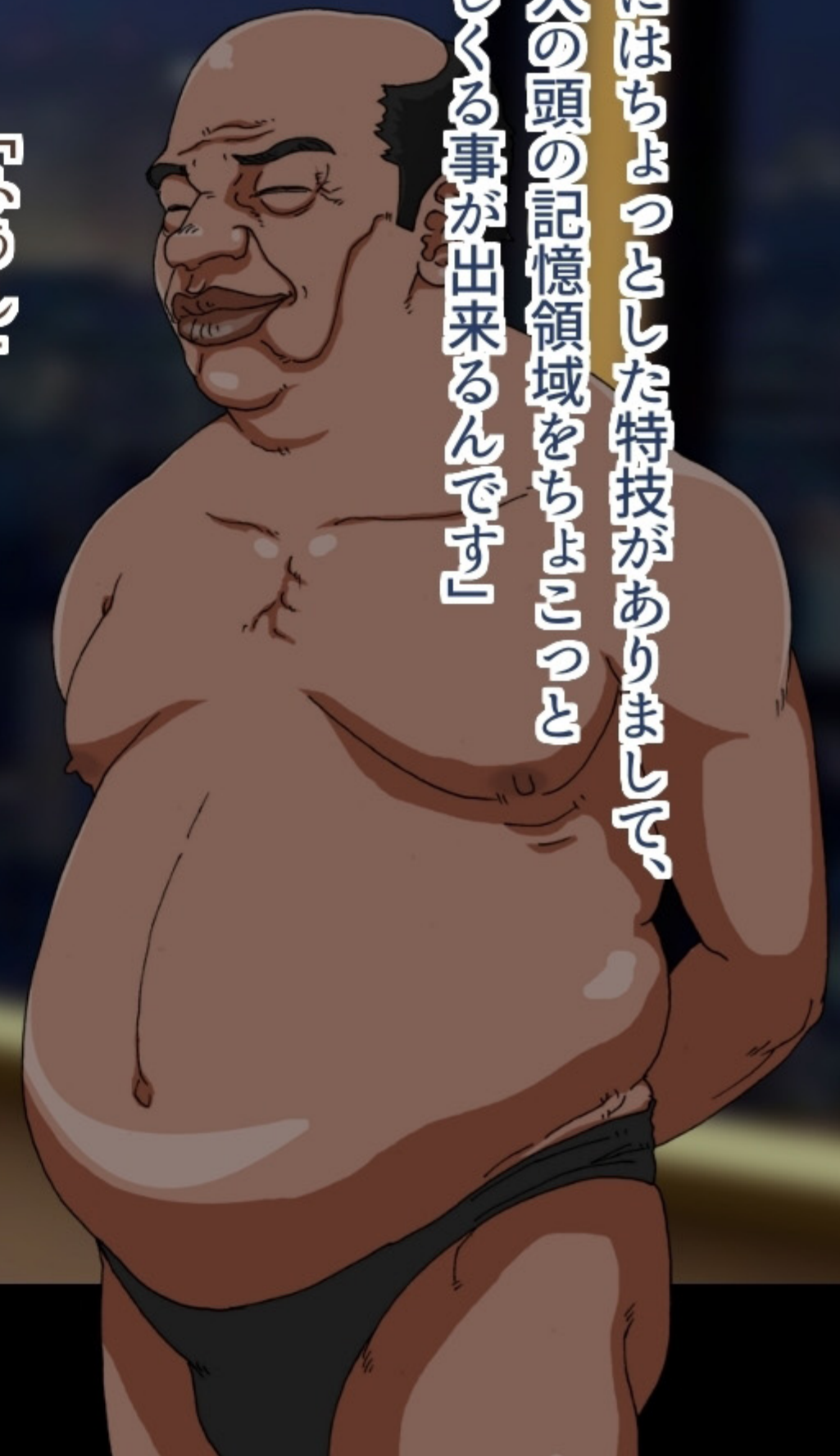
だが記憶が無いのだから無理だろう」

「無理じゃありません。」

無いのなら作ればいいんです」

「？」


戸熊は怪訝そうに顔を歪めた。



「僕にはちよつとした特技がありました、
他人の頭の記憶領域をちよつと
いじくる事が出来るんです」

『ふうん』

戸熊はそれを聞いて青頭巾に
やや小馬鹿にした視線を向けた。
所謂サイキツカー、超能力者の類は戸熊も知っている。
治安の悪い区に赴く際には
戦闘に特化したサイキツカーを
ポデイーガードとして雇つたこともある。



彼らは硬化させた肉体で銃弾を弾き
人間を念力で折りたたむ事が出来た。
そんなプロフェツショナル達と比べれば
目の前の青頭巾の力はとても弱々しく思えた。

『その程度で何が出来る?』と思いましたがね?
……いいですか?』

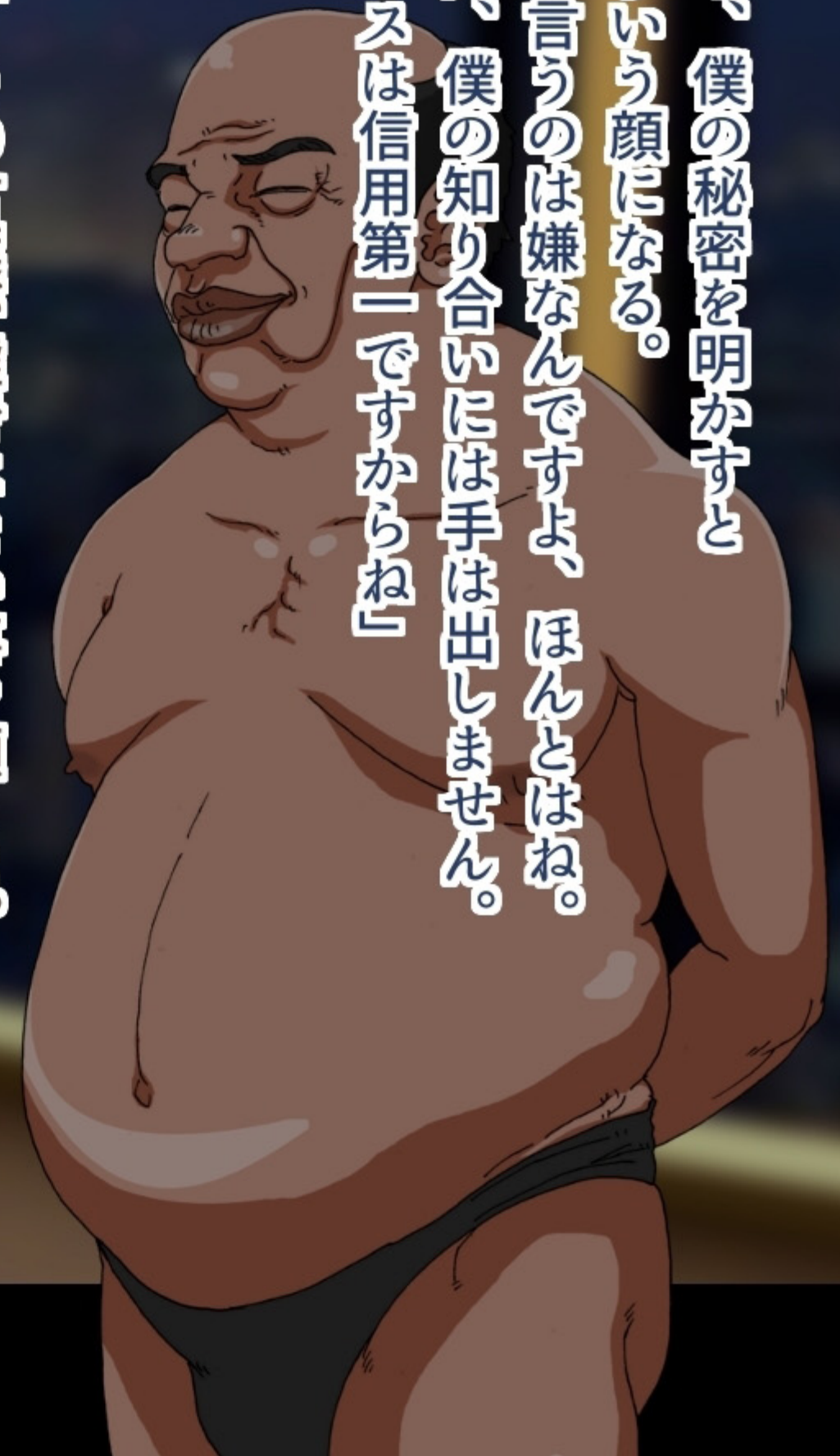
記憶が人格を形成し、人格が人間を定義するのならば
僕は人を思うがままに操ることが出来るという事です。
ま、条件はいつくかありますから誰でも彼でもって
わけにはいきませんがね』

『……まさかこのフロアに入つてこれたのは……』

まるでコンビニに酒を買いに行くような気軽さで
この嚴重なフロアに侵入してこれたのが
記憶を操る能力によるものなら
自分の想像を超える危険度がある。

この男に出来ない事はないのでは……?
もしかしたら自分の頭も
既にいじられているのでは……?

一瞬で頭を駆け巡つた最悪の想定に
戸熊の顔面は蒼白した。



「まあ、僕の秘密を明かすと皆そういう顔になる。

だから言うのは嫌なんですよ、ほんとはね。大丈夫、僕の知り合いには手は出しません。ビジネスは信用第一ですからね」

「…その言葉が嘘ではない事を願うよ。

それで、具体的にどうするつもりかね？」

「…ここで説明するより見てもらった方が早い。

…彼女はどう？」



戸熊は「ああ」とだけ言つて顎で部屋奥のドアを指した。

「別に服は着替えさせなくても」

良かったんですがね」

「ちようど今日はこの格好で

抱いてやるうと思ってたんだ。

支障はあるまい？」

ズララ……

「んんん!!!」

「どうしたんだい穂波ちゃん。

何か気に召さないかね？」

戸熊は喚く半蔵の口から

ギヤグポールを取った。

「…一体今度は」

「何をするつもりだ…!」

「半蔵、今から君の記憶を」

「上書きする」

「何の話をしているんだ。」

「早く解放しろ!」

「ふむ、やはり記憶は」

「戻ってないみたいだな」

「私は半蔵という名前ではない。
人違いだ」

「ただの一般人がこんな状況で」

「冷や汗一つ掻かずに相手を」

「睨み付けられると思うかい？」

「君は普通の人間じゃないんだよ」

「舌を噛まないよう」

「口を塞いでください」

「戸熊は再びギャグボールを」

「半蔵の口に装着した。」



「忍としての記憶が無い事は
逆に好都合です。」

偽の記憶を植えつけても

記憶の齟齬が起きにくい。

勘の良い奴はそのほころびから

記憶の真偽に気づいて

しまいますからね」

「それでどんな記憶を
埋め込むんだ？」



「そうですねえ……。」

ではこうしましょう。

忍衆の半蔵は組織からの命令により

戸熊慶三の愛人となり

彼が持つ広い人脈からくる

裏社会の情報を収集する事が課せられた。

組織に絶対忠誠を誓う半蔵は

戸熊の命令に決して

逆らう事は出来ない」

「!」

「愛人？ぬるい事を言うんじゃない。

いいか、芹沢穂波こと半蔵は

この戸熊慶三専属の『性処理奴隷』となり

わしの呼びかけにはすぐさま応じ、

いつでもでも好きな時好きなように

わしに体を差し出し性処理をする！

これが『絶対命令』であり

逆らう事は出来ない！

…これでいけ」

「ふうふうっ！んんんう！」

半蔵の言葉にならない抗議も無視し

青頭巾の怪人は一歩前に踏み出した。



「…いっせいでしょら。では早速…」

青頭巾の手先から蒼い気のうねりが
生まれると、それが鎖に
つながれた半蔵を襲った。

「……！」

淡く発光する煙のようなものが
頭で渦巻き半蔵の瞳孔が大きく開く。

「……終わったのか？」

戸熊は拍子抜けしたように聞いた。

「……ええ。」

「一応確認の為に彼女を
少し可愛がって
あげてくれませんか？
反応を見たい」

戸熊は半蔵の回から

ギャグボールを外すと
そのまま豊満な乳房に食い込む
ビキニの紐に手を掛けた。

「……ッ」

戸熊は半蔵の口からギャグボールを外すと
そのまま豊満な乳房に食い込むビキニを脱がした。

「ほほ、何度見てもええ乳しとるわい」

ふんふん

「半蔵、今どんな気分だ？」

青頭巾が注意深く聞いた。

「……くっ……、任務でなければ
貴様らの好きになど……」

「ふむふむ、利いているようだ。

理事長、どうぞ続けてください」

「いいとも。

よろし、その可愛い乳首を

虐めてやるか」



「ん♡!くううっ……」

「ああ、このヨリヨリした
勃起乳首の感触がたまらんな!
どうだ首切り半蔵!
気持ちいいか?ん?」

ゲニッ♡

フーッ
フーッ
クニッ♡
クニッ♡

「黙るかいボケ。」

「軽くイかせてやるわい!」

戸熊は乳首を捏ねていた左手を

半蔵の秘所にあてがった。

「だ、黙れ……」

「イけー！ほらほらほらほらー！ー！」

「やめー」

おちちちおちちおちち！

びんぽい

びんぽい

ん

ん

んんんんん

んんんんん

ちちちちち

ちちちちち

ちちちちち

「ああ、あつ♡」

「口では嫌がっても体は正直じゃないか。
こんなに床を汚しおって」

「これは…ち、違う…」

自分の秘所から垂れ落ちる愛液を見て
半蔵は赤面した。

「ほっほっほ、

これだけ水分を失うと
喉が渴くだらう？」

「？」

ぐちゃぐちゃ♡

ハアツ

ハアツ

戸熊の指が半蔵のぬかるんだ
秘所をこねくり回すと、

くちやくちやといやらしい水音が
コンクリの部屋に響いた。

「わしのツバをたっぷり

飲ませてやるわ」

「なり!?!…ふ、ふざけるな!!」

「暴れるな！」

「ほら口開けんかい！」

戸熊の指が乱暴に突っ込まれると、
半蔵は必死に抵抗した。

「や、やふえるおつ!!!」

「理事長、彼女に
思い出させてあげてください。
忍の任務を、絶対命令を」

ク
ッ
ッ

「ほほ、そうだったそうだった。
首切り半蔵よ、
わしの性処理奴隷である以上
お前に拒否権は一切無い！
この忍衆より与えられた
崇高な任務を放棄するつもりかね？
組織に逆らうのかね？」

「ぐ…くうらうら…」

「んん？いいのか？
わしが機嫌を損ねれば
情報は一切与えんぞ？
わしの持っている裏社会の情報を
手に入れなくてはならないんだらう？
忍衆の指令は絶対なのだらう？」

「うらうら…」

半蔵は悔しさで音が
聞こえそうなほど歯ぎしりした。

「ほれ言うてみい!

ご主人様ののぐじゅぐじゅにシエイクした
ツバを飲ませてくださいと言え!

そう言って戸熊は口の中の唾液を攪拌し始めた。
汚らしい音が耳に届くと半蔵は吐き気を催した。

ガキョウガキョウ
ガキョウガキョウ

「おお、おお、ご主人様の…」

「聞こえんなあ。もつと大きな声で!」

「ご主人様の…ぐうっ…
ぐじゅぐじゅにシエイクした…
ツバを…の、の…飲ませてください…」

(嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だのっ!!)

『ようしたっぷり飲ませてやる！
ほら口を開ける！』

デロ
〜
ッ

戸熊の口から濁った唾液が
トロリと流れ落ちる。

それを見ていた青頭巾が
絵面の気持ち悪さに思わず顔を背けた。

「んあっ！やふええつ！
ああああ!!」

（ああっダメツツ！口の中に…
こんな奴の唾が入っちやうっ!!）

「ほら飲め！」

「んああああ…」

ヌ
ヂ
ャ
ァ
ァ
ァ…

意識が真っ白になった半蔵は
言われるがままに戸熊の濁った唾液を
喉に流し込んだ。

生暖かい戸熊の唾液が
舌に触れて広がった瞬間、
半蔵の思考はショートした。

「そのまま飲み込め、ほれ飲め！」

「んぐっ、んぐうっ！」

「ほほ、どうだ？美味いか？」

とびきりの美女、それも伝説の忍

首切り半蔵に自分の吐き出したツバを飲ませる。

戸熊は女の口を穢しマーキングする

征服欲に酔いしれた。

「ほっほ！飲んだ！」

わしのツバを飲みおった！

記憶改ざん、これは凄い能力だな！」

「理事長、実は記憶の他に

ちよつとした催眠も掛けました」

「ほう？」

戸熊は興味津々で青頭巾の方を見た。

「『メス豚半蔵』という

言葉を囁かれると

一時的に理性のタガが外れて

快楽に忠実なメスに成り下がります」

「ほほ、それは面白い！」

「おええええ!!!」

半蔵は生臭い液が体の中に入っていく

生理的嫌悪感に思わずえづいた。

「上書きされた記憶とは違い

ごく短時間だけ利きますので

使いどころに注意してください」

「ほお、どれ。」

『メス豚半蔵』ちゃん』

「……！」

ヒキーンッ

その言葉を聞いた瞬間、半蔵は
OSがフリーズしたロボットのように
ぴたりと挙動を停止させた。

「お？」

異変に気付いた戸熊は
恐る恐る半蔵の顔を覗いた。

瞳孔が開いてる。

青頭巾に記憶を上書きされた時と同じ反応だった。

「はああ……♡」

はあっはあっ、はあぁ♡」

半蔵が盛った犬のように

荒い息をつき始めると戸熊はニヤリと笑った

戸熊はニヤマリして青頭巾の方を見た。
青頭巾はただ黙って頷いた。

催眠は成功した、という事だろう。

「よし今たっぷり垂らしてやろう」

「んんん？どうしたんだあ？

もつとわしの臭いツバを飲みたいかね？

ほれ、おねだりしてみい」

「ばいばい♡

ご主人様の美味しいツバ

もつとください♡」

ハッ♡

ハッ♡

ハッ♡

「あぁん♡

はやく、はやく♡」

半蔵は気が狂ったように

舌をべろべろ動かして催促した。

「んああああ♡」

メ
チャ
ムム...

グ
イッ

戸熊が再び口に溜まった唾液を垂らすと
半蔵の舌はそれを少しもこぼすまいと
大きく突き出て受け止めた。



「ほほ、どうだあ？」

わしのようなエリート

ツバを頂戴出来て幸せだるう？んん？

味はどうだ？美味しいか？」

「ほほ！こりや面白いのお。」

ほれ、乳も揉んでやるぞ」

戸熊のごつごつした手のひらが

半蔵の豊満な乳房をすくい上げ、

指が柔らかい肉にくい込んだ。

「はあん♡もつといっぱいしてえ♡」

「がはははっ！」

ペロペロ

むにゅん

「んぐっんぐっ！っはあぁ♡♡

とっても美味しいですうう」

半蔵の舌が口周りに溢れた

戸熊の唾液をすくって口に運ぶ。

先ほどから状況を

冷静に見ていた青頭巾が口を開いた。

「そろそろ催眠が切れますよ」

「…はっ！な、何を…」

私に何をした!？」

我を取り戻した半蔵が混乱気味に怒鳴った。

「嘘だ！私はそんな事望んでいない！」

そうは言っても自分の口で自分から
ねだった事を半蔵は覚えていた。
覚えていただけに頭は更に混乱した。

「嫌がったりおねだりしたり
忙しいのお、ふははっ！」

「気に入って頂けたようで」

「ん？…何もしとらんよ。

穂波ちゃんがねだったから

ツバをくれてやったんじゃないか」

戸熊は激昂する半蔵を無視して

極めて冷静に答えた。

「もちろん最高だわい！」

稲富君によるしく言っておいてくれ」

青頭巾は子供の様にはしゃぐ戸熊を
しばらく眺めていた。

特命忍者
半藏

「荒沢さん、結婚しましょう」

これまでの交際期間中、半蔵は既に二度プロポーズを受けていた。

しかしそのたびに時期が悪いとか気持ちの整理が出来ていないとはぐらかしてきていた。

「……小川君、その話は……」

それでも小川は諦める気配を全く見せず、二度目の勝負を仕掛けてきたのだった。

「また、ですか？」

「じゃあいつまでなんです？」

「後1年？2年？」

「僕達の心は通じ合ってる。」

「これ以上先延ばしする事に
なんの意味があるんです？」

『……』
他人からここまで感情をストレートに
ぶつけられた事一度も無い。

言葉に詰まり心臓が早鐘を打つ。

戦いの時でさえここまで緊張した事は
半蔵の経験上一度も無いほどだった。

（悪党の血にまみれたこの私が、
こんな真つ当な人間と結ばれるのは間違っている。
私は彼に相応しい女ではない…）

「気持ちには…」

とても嬉しいけど…私は』





唇を通して感じる心地よいの体温が

ひび割れた荒野のような心に癒しの雨を降らせた。

その雨粒が濁いた大地染み渡ると

半蔵の胸一杯に温かいものが溢れるのを感じた。

今まさに半蔵は幸福の絶頂であつた。

「芹沢さん、貴方を愛しています。
貴方と共にこれからの人生を歩みたい」

「小川君……」

「僕と結婚してください」

「……」

もはや半蔵に抵抗する力は残っていなかった。
今ここにいるのはただの一人の女、芹沢穂波だった。

きつとこれが幸せというものなのだろうと思った。
悪党を殺す事だけ、その為だけに己の時間を費やしてきた。
そんなくすんだ錆色の人生に
桜の花吹雪が吹いたような感覚だった。

「少しだけ時間を貰っている？」

「私こういうの初めてだから、ちよつと心の準備をしたくて…」

「ええ！それはもちろん」

「……これで終わりにしよう。」

半蔵という生き方はこれで終わり。

これからの人生をただの教師として、

彼に愛される芹沢穂波として生きていく……」

半蔵の心に一つの決意が湧いた瞬間だった。

「そうはいかんねえ」

「ああそうだ」

『!』

半蔵はベッドから跳ね起きると額に浮かぶ玉のような汗をぬぐった。

ウッドデスクの上に置かれたデジタル時計を見る。朝の六時。戸熊の責め苦から解放されてまだ三時間しか経っていないが眠気はなかった。

あんな悪夢を見るくらいなら

二度と寝たくないと思うくらいだった。

半蔵は壁に掛かった仕事用のフオーマルスーツを一瞥して深く溜息をついた。

忍の任務とはいえ今日からあの気色悪く醜い男の情婦のような真似をしなくてはならないからだった。

『……早く終わらせなければ……』

半蔵は愛する婚約者にバレないうちに任務が終わる事をただただ願うばかりだった。

学園に到着して早々、半蔵は
理事長室に呼び出されていた。
理由は言うまでも無く戸熊の性処理だった。



半蔵が理事長室に入った時、
戸熊は部屋の隅に設置されたパーテーションの
向こう側で服を脱いでいた。



「おおよく来た穂波君。
あれからよく眠れたかね？
睡眠不足は美容の大敵だからねえ」

「……」

半蔵は戸熊の自分勝手な発言を
無視して傍に近寄った。

「昨日あれだけ楽しんだというのに、」

君の体を思い出すだけで

すぐにウズウズしてしまっただ。

すまんが、軽く一発回で抜いてくれんかね」

「…盛った豚め…」

ほとんど音が喉から出ないくらいの小声で

半蔵は悪態をついた。

「スーツのままでは窮屈だろう。脱ぎたまえ」

戸熊がニヤニヤと半蔵の肢体を視線で舐め回す。

「…断る」

「脱げ」

声には拒否する事を許さない
強い色を含んでいた。

半蔵は抵抗を諦め

スーツを脱ぎ下着姿の状態で、

全裸の戸熊の前に跪いた。

「ほほ、わしの指示通り
黒い下着を着てきたか。

穂波ちゃんは何を着せても
よく似合うのお」

戸熊が半蔵の首から下を舐めるように見た。

「……さつさと済ませる」

半蔵が憎らしげに呟く。

（なんて醜い、汚らわしい奴だ…）



「ほれ見る、もうわしのはピンピンだろう」

戸熊が服を脱いで男根を晒すと、

汗と香水と加齢臭が混じり合った空気が漂い
半蔵の鼻を突いた。

怒りを煽るような戸熊の質問を半蔵は無視した。

この男の遊びに付き合うのはうんざりだった。

「ほくお、じゃあこれはどうだ？」

クワァ……

「あの首切り半蔵とあるうものが
こうしてチンポ晒した男の前に
下着一枚になって跪くってのは
どんな気分なんだ？ん？」

そう言って戸熊は血管の浮き出た
グロテスクなそれを握り半蔵の顔に近づけた。

「ぐっ…」

悪臭を放つ汚物が

半蔵の張りのある頬を叩いた。

汗や皮脂、粘液でべたつく男根が

半蔵の頬に当たると、

軽くへばりついて糸を引いた。

もうすでに戸熊の物は先走り

を滲ませている。

ベチン

ベチン

「男の勃起チンポで顔叩かれるのはどうだ？」

最強の忍がチンポビンタされて

何も出来ないってのはどんな感じだ？」

「…お前は絶対に殺してやる…」

「がははは、それは楽しみだのお！
殺される前にたっぷり楽しまんとな！
ほれ舐める！」

戸熊が半蔵の顔のすぐ前に物を突き出した。
鼻先にあるそれがツンときつい臭いを放つ。

「ぐっ…」

半蔵に拒否権は無かった。

舌に熱くねばついた男根が触れると

半蔵の体は強烈な不快感で身震いした。

ぬるが

「おっ！おほほっ！いい舌使いだ。
稲富君のどこの調教師の成果が
出てるようだのおっ！
よおし、そろそろ啜えろ」

「…んっ、ふう…」

性交の絶技を覚えていた舌と唇が
絶妙な力加減で亀頭を迎え入れる。

戸熊に嫌悪する半蔵の意思に反して、
調教師に仕込まれた肉体が
オスの象徴に敏感に反応したのだった。

「おっ！おおおっ…」

滑らかで柔らかい唇が吸い付いてきて…！
ほおおっ！舌が亀頭を舐め回しよるっ！
マラに吸い付く口の粘膜があつたかくて
気持ちいいのおお…」

半蔵の技巧に戸熊は饒舌になって褒め称えた。
戸熊ほど女を抱いてきた者でなければ
この一瞬だけで射精していた事だろう。

稲富の調教師が超一流と呼ばれる理由を
戸熊はこの時確かに理解した。

チコッ

ーゆん



「じゅっぷじゅっぷっ!じゅるるるっ!」

「ほおおお...たまらん...!!」

ジュッホッ

ん
ジュッ
ジュッ

ジュッ
ジュッ

ジュッ

ジュッ
ジュッ

ジュッ
ジュッ

ジュッ
ジュッ

ジュッ

ジュッ

「一体今まで何本のマラを啜えてきた？
何回精液を搾り取ったんだ？ん？
こりゃ生まれついての淫乱だのお」

（…クツ、この豚調子に乗って…）

「いいか、一流の忍たる者どんな状況でも
任務を遂行出来ねばならん！
わしのデカマラから一発抜くまで
絶対に奉仕を止めてはならんぞ！」

そう言うって戸熊は壁に掛かった
大型のアンティーク時計に目をやった。

半蔵は何か嫌な予感がしたが、
早く終わらせたい一心で奉仕に集中した。

グムホリツ

グムホリツ

グムホリツ

グムホリツ



理事長室のドアから軽快なノック音が鳴ると

「失礼します」

と快活な声と共に

半蔵の恋人、小川牧人が入室した。

「あ」

まさかの婚約者の入室に
半蔵の心臓が止まりかけた。



「あ、すみません。着替え中でしたか。
出直しましょうか？」



パーティーションの向こう側で
婚約者が跪き理事長の陰茎を
口で奉仕している事など
小加は知る由もない。

「おお、時間通りだな。感心感心」
戸熊は特別変わった様子を見せることなく
小加に應對した。

「いや、構わん。
このままですまんが
ちよつと話そう」

「なんで牧人が…!?!」

「どうした?奉仕が止まっているぞ。」

早く続けるんだ。

わしがイクまでこの遊びは

永遠に終わらんぞ?

恋人のすぐ横で

わしのザーメンを頂戴しろ」

戸熊は小声で半蔵に指示した。

「え?すみません、何か言いました?」

「ここでは声が聴きにくいだろう。」

もっと側にきたまえ」

「あ、はい!」

「…同僚の芹沢穂波君の仕事ぶりはどうかね？」

「え、芹沢先生ですか？」

そうですね、僕が評価してるみたいで
おこがましいですけど、
生徒一人一人に親身なって接していますし
仕事熱心ですから僕も
見習いたいと思っていますよ」

ズボッ

ズボッ

ズボッ

ズボッ

「ほおそうかそうか。

採用したわしの目に狂いはなかったようだ。


…おう、そうだもつと裏筋を舌でなぞれ…。

唇でカリをしごくんのだ…」

「？」

戸熊が時々聞かえないくらいの声で

ぼそぼそと喋るので小川は困惑した。



「ところで小川君は……、
穂波君と付き合っておるね？」

小川はしばし考えた。

二人の関係は周りには秘密にしておいて欲しいと
付き合い始めた当初に強く言われていたからだ。

「…」

だがこうやって呼び出された上
およそバレてしまっている状況で
シラを切るのは不誠実だと小川は思った。

「…はい、ただし真剣です。
結婚を前提に付き合っていますし、
つい最近も婚約しました」

「ほおそれはそれは。
そういう事ならわしも応援しよう」

そう言って戸熊の陰茎に奉仕する半蔵を
いやらしい目を見た。

「…」

半蔵の罪悪感が頂点に達したのか。
ついに回の動きが止まってしまった。

「……ふん、反抗する気か？」

（それならぼこっちにも考えがあるわい）

「メス豚半蔵……」

ピキ
ピキ
ピキ



戸熊は半蔵だけが辛うじて
聞こえるくらいの小声で呟いた。

（ふふ。この感じ、効いたな）

半蔵の変化を見て取った戸熊は
醜い顔を歪ませてほくそ笑んだ。

「…ところで、小川君は彼女の
どういいうところを気に入ったのかね？」
確かに彼女はとても美しいが」

「そ、それは正直言って最初は第一印象で
一目惚れですよ…。」

他人と距離を置こうとする
冷たい感じはあったんですけど
生徒に対する母親のような優しい態度とか
時折見せる少女のようなあどけない笑顔とか
見せられちゃうともう駄目でしたね」

愛する女性を頭に描いた小川は早口になった。

「ほぅ、確かに彼女はギャップがある。
そこがわしも気に入っているんだ」

戸熊は小川と自分の股ぐらに
跪いて奉仕する半蔵を交互に見て
気色悪いニヤニヤ笑いを続けた。



「キスはもうしたのか？」
戸熊は明け透けに聞いた。

「ええ!?…いやあの、……はい
プロポーズの時に…」

「ほお、初々しいのお。」

まあ…、恋人と熱いキスをしたその唇は今、
わしのチンポにデイープキスしとるがのお…」

半蔵にだけ聞こえる微かな声で戸熊は皮肉った。

「…？す、すみません
聞こえませんでした。
もう一度お願いします」

「ふふふ、いや何も言っとらんが？」

キョロッ

アハハハ

レパ
レパ
ッ



戸熊は半蔵に目配せした。
イカせる、という合図だった。

半蔵の奉仕の勢いが増すと、
ぐちゃぐちゃと粘質な音が僅かに響き
戸熊の体が小刻みに揺れ始めた。

小川は理事長の異変と異音に気づいた。

「あの、何か変な音しませんか？」

「ああ、すまんすまん。

ガムを噛んどったんだが、

つい音を鳴らす癖が…おふううー!」

半蔵の舌先がカリの入口をくすぐると
強烈な快感に呻いた。

グムホリッ

ジュムラッ

ジュムハッ

モムルッ

「え？」

挙動不審な理事長に
小川は眉をひそめた。



「おっおっおっおっ...!？」

「ど、どうしました!？」

びびびび
んんん

アエエエエ



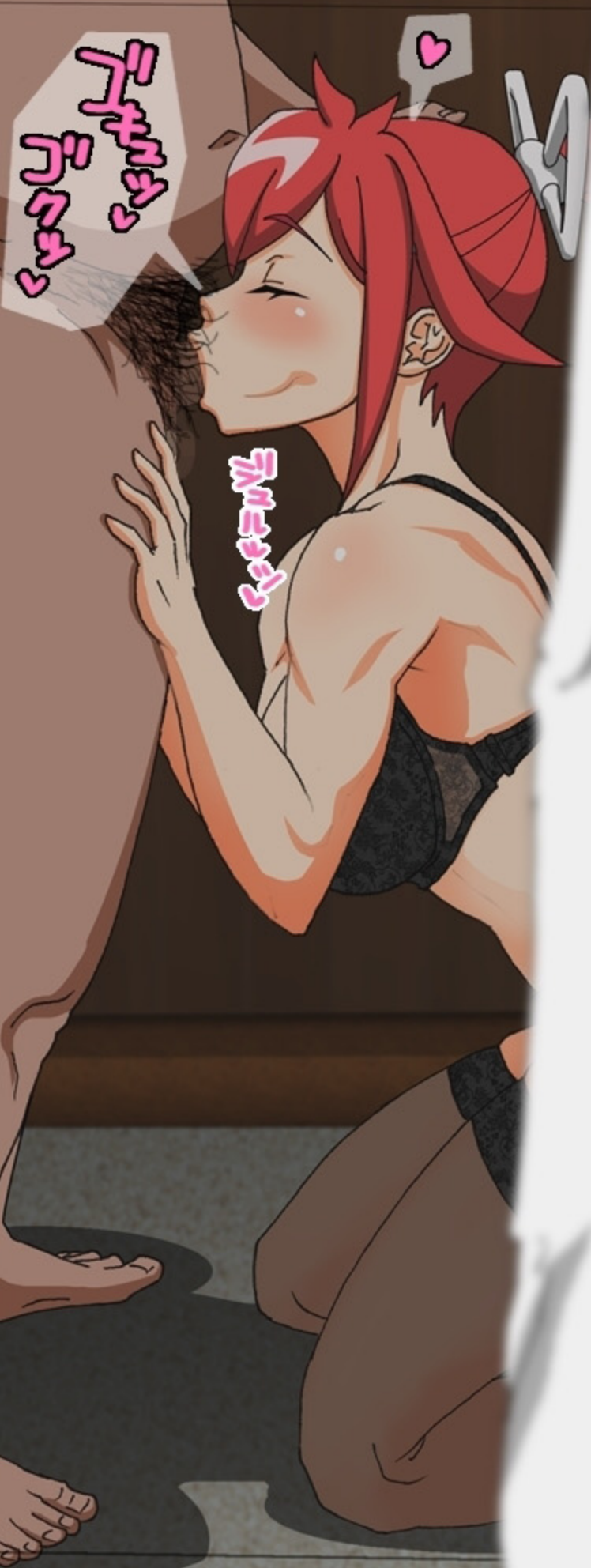
『おうう、い…いやなんでも…ない…
…ふうふう。』

『続きは…ふう…、後で話そう…。
もう行きたまえ』

戸熊の腰が射精の快感でヒクヒクと震える。

半蔵の口が戸熊の男根を強く吸引して

残った精液をちゅるちゅると吸い出していた。



『え？あ、はい。失礼しました！』

小川はだらしなく弛緩した戸熊の顔を
不思議そうに見ながらそそくさと退室した。

「ふうふう…。」

よし、まだ飲むんじゃないぞお？

ザーメンたっぷり排泄された

口便器見せてみい」

「ほっほ、我ながら出たのお。
よし、飲め！」

「ふあいい♡」

半蔵の口の中で黄ばみがかかった白い粘塊が
湯気を立てていた。

戸熊の鼻にまで臭ってきそうな熱い汁を
半蔵は舌でゆっくりと攪拌してみせた。

「ニキヤア！」

半蔵はゼリー状の固形が混じった精液を
美味しそうに飲み込んだ。

「ぷあっ♡」

あまりの粘度に一度では飲み込めず、半蔵のノドは数回に分けて上下した。

「これから毎日穂波ちゃんのお口に特濃ザーメンを注いであげるからねえ」

「♡馳走様でしたあ♡」

戸熊は空になった奴隷の口腔を満足げに見つめ、頭を愛おしげに撫でさすった。



特命忍者
半藏





半蔵は戸熊に渡された忍スーツのレプリカを着て
S区内のとある地下倉庫に来ていた。

携帯に見知らぬ番号から着信がくると
半蔵は迷うことなく出た。

『さっさと済ませろ。私は忙しい』

『そう素っ気なくするなよ。
側にポストンバッグが置いてあるはずだ。
その中にある瓶から薬を一錠取り出して飲み込め』


半蔵が辺りを見回すと、コンクリの柱の下に
言われた通りの物が転がっていた。
バッグを開けて瓶を拾い上げる。



「今は、こいつの言う通りにするしかない！」

半蔵は一度深呼吸して瓶から得体のしれない
カプセルを錠取り出し、飲み込んだ。

すぐに意識が朦朧とし、足に力が抜けて崩れ落ちた。
半蔵はブラツクアウトしかけた視界の向こうで
人影が近づいてくるのを見たのだった。



窓の無い殺風景な部屋には
ナイフやワンプッシュ式の注射器など
物騒な品が乗ったスチール製の
キャリーラックと
安物のアルミテーブルのみがあった。

その部屋で半蔵はゴムロープで縛られ
テーブルの上に乗せられていた。

「ようこそようこそ、俺の遊戯室へ。

ここではいくら叫んだって

誰にも聞こえないし、

誰も俺の許可無く入ってはこれねえ。

この狭い世界に

俺たち二人だけって事だ」

見知らぬ男の声で、

半蔵は意識を取り戻した。

キッ

「……!」

目隠しを取られた半蔵は
突然の光に一瞬眉を潜めたが、
すぐに目の前にいる

小柄な男を見とめて睨みつけた。

「へへへ、怖い怖い。

そう素っ気なくするなよ。


俺とオメエは因縁浅からぬ

仲なんだからよ」

小柄な男、宮川は側のラックから
ナイフを一本手に取った。

「!」





「安心しな。オメエに傷を
つけるのはご法度なんだ。
綺麗な体のまま戸熊の奴に
返さなきゃならねえんでな」


宮川は眼をキラキラさせて
半蔵のレプリカスーツに刃を当てた。

「暴れんじやねえぞ。

手元が狂ったら

体を切り裂いちまうからな」

「……んん！」



「…おろし、これでいいか…
へへ、大事なところが丸見えだぜえ？」

「…」

「今からオメエは物同然に扱われるんだ。
もうオメエは人間じゃねえ。
男を悦ばせ精液を
吐き出させる為の道具になるんだ」

局部を晒された半蔵は

目の前の小男を気丈に睨み続ける。

「いいねいいねえ、その眼つき！」

それだよそれが見たかったんだ！」

宮川は興奮で口からツバを飛ばした。

「へへへ、そろそろ
目の前にいる男を
思い出したんじゃないかねえか？
ほら、俺の名前を
言ってみるよ」

宮川が半蔵の口に押し込まれた
ギャグボールを外した。

「ぷあっ…、お前の事など知るか。
だが私が知らないという事は、
お前が取るに足らない
小者だという事だ」

半蔵が鼻で笑うと、
宮川の不健康な顔色が
たちまち赤黒くなった。

悪党の中でも特に危険な
人物だけを狙う首切り半蔵に
殺されるといふ事は
逆説的にその人物が裏社会の
大物であるといふ事を
証左していた。

そこから言えばこの宮川は
忍衆にとって箸にも棒にも
掛からぬ存在であった。

「…確かに昔の俺は
一山いくらの下らねえ
チンピラだった。
俺の兄貴と違ってなあ!」

宮川は怒りに任せて
半蔵の乳首を
指の腹で揉み潰した。

「くうううっ…!」

ギクギク

「へへ、コリコリして

騨りがいのある

いい乳首してんじゃねえか。

傷物にしていいならすぐに

特注のピアスを通して

やるんだけどなあ。

戸熊との約束だから

しょうがねえ」

「んん、」の層が…」

「兄貴は直系組長だった。
今調子に乗ってる
稲富より格上だったんだ。
俺は兄貴の下で
やってくつもりだった。
だがその夢は断たれた。
オメエのおかげでなあ」

「…宮川虎吉」

半蔵は自分が今まで
殺してきた悪党の名前など
いちいち覚える事はしない。
しかし、今思い出した。

半蔵の頭の片隅に
その男の名が残っていた。
宮川虎吉（みやがわとらよし）。
その男は人の不幸を耕して飯を食い、
幸福の芽を摘んでほくそ笑む
屑の中の屑だった。

「…今のうちだけ
粹がっているがいい。
お前もお前の兄や
他の屑どもと同じように、
最後は必ず私に
殺されるんだからな」

「へへへっ！
自分の置かれてる
状況がわかってねえ
みてえだなあ？」

「これがあの半蔵の...
いい感触だぜえ」

宮川の指が半蔵の

Gスポットを探ろうと

動き回ると、いやらしい
粘質音が部屋に響いた。

「ぐっ...。くああ♥
て、手をどける...!」

「おい、いっちょ勝負しないか？

俺の手マンで潮を吹かずに
我慢出来たら

今日はもう帰してやらあ。

だが出来なかったら、
オメエは負けだ。

屑と見下し殺してきた

ヤクザの手で潮吹かされた
哀れな忍になるんだ。

それを一生心に

刻んで生き続ける」

「...くだらん遊びに
付き合うつもりはない...」

「へっ、バカが!

オメエにやる気が

あるうとなかろうと

俺のこの手が動きゃあ

勝負は始まんだよ!

おらいくぞお!」

ニクツ

クチュツ

「なんて奴だあ…。

これでイかなかった

スケなんて一人も

いなかっただのによ…。

ちよつとプライドが

傷ついたぜえ俺あよお？」

宮川の手は半蔵の愛液で

ぐっしよりと濡れている。

この体の反応からいって

絶頂していかないことは

有り得なかった。

しかし半蔵は

忍として鍛えた

精神力を持って快楽を

ねじ伏せたのだった。

「ふうっふうっ…♡

これで終わりか？

調子に…ふうっ♡

乗るなよ…」

楽に堕とせると高を括っていた

宮川もこの時は考えを改めた。

この女は只者ではない、と。

「へ…余裕ぶりやがって…。

それならそれでこっちも

マジでいかせてもらっせ」

グリキキア
ムハハ

「何をやるつもりだ」

宮川がラックの上に乗った
注射器を取り出したのを見て
半蔵は胸騒ぎを覚えた。

「闇市で流通してるなかじや
最高級のドラッグだ。
どんだけすげえ忍だろうと
こいつを打たれば
あつという間にいき狂うぜ…」

「……救いようのない屑だな。
お前の兄も私に殺される直前まで
薬物の力に頼って
無力な女性を犯していたぞ。
兄弟揃って同じタイプの
下衆だとはな…」

ゾ
ン
ク

「…ほざいてる。

オメエはこの後俺のチンポで
何度も何度もヨがり狂うんだ。
オメエの無様な姿が
目に浮かぶぜ…」

宮川が半蔵の内腿に
注射器を突き立てた。

「っっ!!」

「へへっ…へへへ…」

膣がビクビク痙攣

しっばなしだぜ？

……これは俺の勝ち

だよなあ？」

「はあ~~~~~っ♡♡！」

はあ~~~~~っ♡♡」

強すぎる快樂が半蔵の
脳をショートさせていた為、
宮川の問いかけなど
全く耳には入ってこなかった。

宮川は半蔵の乳首を

ぐりぐりと指で揉みながら

優越感で股間を熱くたぎらせた。

ヒキキ

ヒキキ

ヒキキ

ヒキキ

「んじやあ、勝利の祝いに
生チンポ挿入といきますか!」

ハアッ
ハアッ

宮川がブリーメラパンツを
ずり下げるとガチガチに
振り返った陰茎が
勢い良く飛び出た。

女の半蔵と比べても
小柄で細見の宮川だが
この部分だけは一般の
成人男性を大きく
上回っていた。

「ふあ、ふざけるなあ…」

「おいおい舌が
まわってねえぞ?
大丈夫かあ?」

「う……ごるすうう」

「ぎやははは!
ほざいてるよ。
おら!入れちまうぜえ!」

「や、やめ」

「あああああああ〜っ♡♡♡」

「おお！おおお〜っ！

これが伝説の忍、

首切り半蔵の

生マンヨかあ〜。

ぐちよぐちよの

ヌルヌルじやねえかあ〜」

「あああつ♡」

ヌルヌル

フワッ

グニッ

ツッ♡

ズ

「すっげえ締め付け！
へへへへ、
こいつ入れただけで
いきやがった！」

フムーッ

フーッ

「クソみたいに嫌うヤクザに
生で犯されるぞ半蔵お、
社会のゴミ？下衆？
屑？好きなだけ言えよ。
オメエは今そんな奴の
チンポをハメられて
ヨガってんだぜえ？」

「ふぐううううつつっ♡」

「へへへ！悔しいか？
悔しいか半蔵お！
オメエに殺された
兄貴の分まで
楽しんでやるぜ！」

生まれついでこのサド
である宮川は理解していた。
一流の女戦士が最も嫌うのは
戦士として扱われず
ただの女として弄ばれる事だと。

そして弄んでいる相手が
兄弟の仇、あの伝説の半蔵とも
なればサドの興奮は頂点に達する。

「あぁあつ♡んはあつ♡あぁあぁ!!」

ハッ

ハッ

ハッ

「なんだまだ軽く
腰振ってるだけだぞお？」

もういくのか？

オナホの癖に
生意気だなあ、ええ？」

「い、イグっ♡イグウウっ♡♡」

「へへへへ！」

イけっ!!

ヤクザのチンポで

イっちまえ！」

ズル
ズル
チャッ♡

ズル
ズル
チャッ♡

ズル

ズル
ズル
ズル
ズル
ズル

『~~~~~♡♡♡』

『おほほっ！すげえ膣痙攣！』

『クッッッ』

『ハッッッ』

『ムッッッ』

『っはあ~~~~~♡
はあ~~~~~♡』

『へへへ、勝手にいきやがって。娼婦だったら客に殴り殺されてるところだぞ？』

『も…もうやめ』

『悪いねえ、俺は遅漏なんだ。二時間はやりっぱなしじゃないと』

『いけねえんだよ』

『そ…そんな…』

『ムッッッ♡
ムッッッ♡』

『ムッッッ♡』

「二時間後。」

追加の媚薬を打たれながら
延々と責められ続けた
半蔵の体は鈍い反応しか
示さなくなっていた。

医学に明るい者ならば
脳と体に深刻なダメージを
受けている事は
簡単に見て取れただろう。

「ああ…っ、あっあっあっ…❤️」

「さっきからいきっぱなし
じゃねえか半蔵お…。」

こっちもそろそろ出すぜえ。

奥でしっかり受け止めるよお、

屑の遺伝子で孕みやがれ」



「ふいっふいっ。
やっぱ生で中出しは
最高だぜえ…。」

もし戸熊がオメエの体に
飽きてオークションに
売り払ったらよお、

今度こそ競り落としてやるぜ。
50億でも100億でも
出してなあ。

そんでオメエの体に
致死量の媚薬ブチ込んで
ヨガリ殺してやる」

「うあああ…」

「戦士として戦って死ぬると思うな？」

ヤク中の商売女みてえに

飲まされた小便と精液のゲロを

ノドに詰まらせて死ぬんだ。

へへ、想像しただけで

また勃起してきちまったよ…」

おめえ

その後夜が明けるとまで、
半蔵は宮川の性処理玩具として
弄ばれ続けた。

体験版のダウンロード

ありがとうございました！



これからもサークル・ジエイザルゴを
よろしくお願いします！